



## 総会記念講演会

# 21世紀における日本文化

辻井 喬  
作家・詩人

2009年5月29日

客観的認識に立った自国文化への自信なしには、国の自立性というものはない。この国において、その文化がまさに衰弱していると指摘する。衰微の原因を①共同体消滅や中間組織の信頼喪失②維新以来の「思想と感性」の不一致③戦後の伝統断絶などの点から説明した。その上で、本来、日本人は文化、芸術に秀でているのだからとして、報道界や言論人が各界を叱咤激励して、文化的な再生を主導していってほしいと希望した。

© 日本記者クラブ

ご紹介いただきました辻井喬でございます。

自分の意見を持っている人間にとっては、日本記者クラブの通常総会の後での記念講演というのは、最高に晴れがましい舞台といわれております。そういわれて、私は大変緊張したのです。しかし、考えてみると自分の意見に自信を持っていない人間にとっては、こんなにつらい、緊張する場はない。

私はどうも後のほうに属しますので、夕べから本当に緊張いたしておりまして、何を話したらいいのかなということで悩んで、屠所に引かれる羊のような感じで出てまいりました。

### 揺らぎの時代・送り手の困難性

最近気がついたことから申しあげます。ことしのゴールデンウイークは、高速道路が大変込んだらしい。テレビなどを見ていて、そうすると、私が、車社会が消えたと思ったのは間違いかなあ、という印象を持ちました。

ところが、少したって、ゴールデンウイークのガソリンの販売量の統計が報道されました。それによりますと、販売量は伸びていない。全く伸びていない。私は、おやつと思ったのですね。料金が安くなったこともあって、渋滞 60 km とか 70 km というふうなことが報道されておりました。だから、いつもよりも混雑が激しいのだと思ったら、どうもそうではないらしい。

そこで、よく考えてみると、例年よりことしは特別混雑しているとは、どのテレビも新聞もいっていないわけです。ただ、私が勝手にそう思っていた。ということは、どのメディアも不正確なことはいっていないのだけれども、受け取るほうが勝手に、ことしは特別込んだのだ、それは料金が 1,000 円になつたからだ、と思い込んでしまっていた。いまは大変見る人、読む人の思い込みが強い時代なんだな、ということをあらためて感じました。

よく、メディアは本当のことを教えてくれない、という苦情が財界の方などが口にします。文芸協会なんかへ行くと、類似の発言が文学者の間にもございます。ところが、よくよく考えてみると、こちらが勝手に思い込んでいて、メディアが本当のことをいってくれていない、という場合がかなり多い。

ということは、見方を変えれば、メディアにとっては大変つらい時代が生まれてきているのではないか、というふうに私には思われるわけであります。

しかし、テレビを責めてみても、混雑しているところだから映像に出す価値があるので、普通に走っているところは、どんなテレビもそれは映像に出さないわけです。そこにマスメディアというものの本質と、それが見ている人に違った印象を与えててしまうという結果との間には、実に難しい状況が生まれていく。私はこれを「揺らぎの時代」とか「シミュレーション時代」とか、そういうふうに表現していますけれども、そういうことなのではないかと思っております。

そういう中で、的確に情報を届けるということは、以前よりよっぽど難しくなってきていているということではないだろうか。届けるほうの難しさと、最近はネットでの情報、勝手な情報が飛び交う環境の変化。私は、ネットで情報が飛び交うということは、基本の情報源が正しければ、それは結果としては決して悪いことではないのではないかと思っております。

ですから、そういう意味では新聞、テレビ、そういったものになるメディアは、責任がいよいよ重くなっているのではないかと私は思うわけあります。

それを前置きにいたしまして、なぜ「21世紀における日本文化」というテーマを提案させていただいたかについて申します。やっぱり自分の国の文化について、客観的な認識に立って自信を持てる、客観的な認識に基づく自信を抜きにして、国の独立というのか、ネーションステイトの自立性というものはあ

り得ないのではないか、と思うからであります。

## 自國文化への客観的な認識と自信

最近、なかなか勇ましい將軍なども出てきています。一日も早く再軍備をしないと日本の自立性は保てない、というふうなことをおっしゃったり、大体第二次大戦といったって、日本は蒋介石に騙されたのだから、そこから直さなければいけない、というふうな――。

どこからそういう意見が出るのか、私はまだソースをつまびらかにいたしておりませんけれども、そういった意見というのは、本当はとても危ない意見ではないかと思っております。

自信に基づいて自分の国を愛するということがあつて、初めて軍備というふうなものも生きてくるんじやないか、と私は考えております。実はこれは、戦争直後、吉田茂という人が最も恐れていたことなのだと思うのです。

吉田茂さんは、戦争に負けた国が軍備を持てば、戦勝国にあごで使われるだけで、いいことはひとつもない、と考えていたようです。彼は、何とかして軍隊を持たずに、荒廃した国の経済復興に全力を注ぐ状態をつくれないだろうか、ということに日夜腐心をしていた。そういうふうに私は聞いております。そこへ憲法の原案が示されてきた。その中には、外交問題を解決する手段として、武力を使わない、軍隊を持たないというふうなことが書いてあった。私が白洲次郎さんから聞いたところでは、吉田茂さんは本当にひざを打って喜んだという。向こうからそういってきたんだから、軍備を持たないということを決めてても文句はないだろう、というふうに考えた。

白洲次郎という人は、何か私と縁続きになっているようで、こちらは鈍いものですから白洲さんに会ってもものおじしないので、大変目をかけてくれたというのか、率直にいろんなことを教えてくれたおじさんだったわけ

です。

吉田茂さんのご子息の吉田健一さんからは、こんな話を聞いたことがあります。サンフランシスコ条約の調印に出かける数日前から、おやじはものすごく機嫌が悪くなつた、あんな不機嫌なおやじは見たことがない、と。それは推測すると、独立への一步として、サンフランシスコ条約の調印に行くんだけれども、何年もたつた後でも、自分のしたことが日本にとってよかつた、と思えるだろうか、という心配があったのではないか、と私は考えるのです。

この席には、憲法が決まるいきさつについては、私よりも数倍お詳しい方もいらっしゃいますので、私は直接聞いたことしか申しあげられませんが、どうも私にはそんな感じがしているのです。

ついこの間、吉田邸は炎上してしまった。私は、その吉田邸には非常に思い出があります。父親が他界したときに、生前のご厚誼をいただいたお礼に伺つたら、「君、おまえのおやじが死んで、おれは本当にほつとしたよ」というのです。私の父親のことですから、失礼なことがあったのではないかと思い、「何かやっぱり不始末がございましたか」といったら、「いや、あいつが生きていると、いつこの屋敷を買われてしまうかわからなかつたので、非常に心配だったんだ」と（笑い）。

この間、大平さんの「私の履歴書」という本を読んでいたら「吉田さんとユーモア」という小見出しのところに、これに関連した話が出ておりまして、びっくりしました。吉田さんはそういうジョークをいうのがとても好きな人で、前に会ったときか何かで、総理は食べ物は何が好きですかといったら、「人だね」と。「人ぐらいうまいものはないよ」と。まあ、“人を食っている”ということなのでしょうけれども、そういう座談がとても好きな方でした。機嫌がよいとジョークがポンポン出てくるというふうな人でした。

そういう点では最近の政治家からは、なかなかそういうジョークは出でこない。やっぱ

りジョークというのは、自分の考えがあって、物事を客観的にみるという、したがって、事実との間に距離をとれる人でないと、ジョークは出ない。あるいは事実の変化のテンポが早いので、間合いが取れないのかな、お気の毒にな、というふうに思つたりもするのですけれども。

そういうふうなことで、文化が国民に自信の源泉として保たれているということが、どうしても必要だというふうに私は思う。それで「21世紀における日本文化」などという大変大きな題を、恐れを知らずに申しあげたのです。

### 丸山真男さんの挫折感

吉田さんの話が出た続きで申しあげます。私は、主に大学を出てから後大変教えを受けていた学者の方に丸山真男がいます。その丸山さんが、晩年、口には決して出さなかつたけれども、かなり絶望していたのではないかと思う場面が何度かございました。

8月15日に日本が降伏し、新しい憲法ができる、国体というものも変わって、革命はできた。しかし、その革命が本当の変革になるには、自立して、自主的な判断で物事を認識する、そういう大衆が生まれてこそ、形の民主主義は内容を伴って生きてくる。そういうふうに思つて、8月15日革命説に賛成だったんだけれども、いつまでたっても自立て物事を判断する大衆は生まれなかつたではないか、というふうな一種の挫折感を、どうも丸山先生は持つておられたのではないか。私にはそう思つてならないのです。

グループで一緒に「文明論之概略」を読んだことがあります。丸山さんは数名の後輩たちを前にして、新書のような形で本を書いていく際に、この人間たちにわかれれば大丈夫だと思って、テストに私たちを呼んで話をするわけです。私たちにわかれれば、大体読者にわかるだろう、と。だから、特に私はリトマス試験紙みたいなものに使われていたのではな

いかと思うのです。その中でも、ついに自主的に物事を判断する大衆が日本には生まれなかつた、という挫折感というものが、先生の中にあつたのではないかなというふうな気がいたしました。

そういう状態のところへ、実は大衆的な消費社会というのが出現してきた。これは、おそらく自立して物事を判断する大衆が形成されるには、あまりいい状態ではなかつたのではないか。自分でそれを促進しておきながら、おまえ、よくいうよという感じも、自分自身もしないでもないんですけども、消費社会が生まれてきた。

それでブランドというと、目の色を変えて、相当高いものでも殺到する。おそらくそのこと、つまり外国からの日常生活用品が20年近くにわたつて輸入されなかつた、飢餓状態にあつた消費者の存在というのを、皆さま方はあまりご存じないだらうと思います。

私よりも若い方がほとんどですから、多分ご存じないと思うんです。私が初めて百貨店というところに勤めて、「フランス展」というのをやつたとき、1959年から60年のころです。高島屋さんがイタリア店、それから私がいたところが「フランス展」を行いました。すると、灰皿からくずかごまで、あつという間に売れてしまつた。

日本は工業技術はだいぶ向上してきたけれども、デザインがもう一つパッとしないから、日本の製品は安からう悪からうとしかみられない。デザインを洗練させることで、輸出力を増やそうという理屈で、当時の通産省が外貨を割り当ててくれたので、それができたのです。そういう時代がずっと続いておりました。

### 所得倍増論にさらわれた民心

海外の製品に対する飢餓状態の後に、とにかく難しいことはいわないので、所得倍増でみんな幸せになろうじゃないか、という政策の時代になります。1960年の安保問題の後

です。私はずっと長く生きてきましたので、いろいろな政策転換、成功例も失敗例もみてあります。けれども、安保騒動の後の所得倍増政策ぐらい見事に成功した政策転換というのはなかったのではないかと私は思います。

もうイデオロギー論争はやめよう、それはいずれゆっくり考えればいいんで、それよりもまず、とにかく一生懸命働いて豊かになろうよ。これに完全に民心は收れんされた、さらわれた。

それに反対するほうは、議論にはたけておりましたけれども、そういう生活のかかった問題については、あれは独占資本の陰謀だ、だまされるなというだけで、これはさすがに弱かったです。ですから、どんどん押し切られていった。

いまでも、これは時々議論になるんですけれども、60年安保のときに、全学連が全員国会に突入したら、安保改定は防げたかどうか。突入を阻止したのは日本共産党であり、日本共産党は革命の敵であるとして、新左翼がそこから生まれてくるわけです。そういう新左翼出身の評論家の方と、何度か公開の席上で議論しました。私が非常に不思議に思って「では、あなたはあのときに、全学連全部が突入すれば、安保改定は防げたと思うんですか」といえば「うん、そのはずだ」というのですね。私は「もっと悲惨な状態になりましたよ、ですから、あれは突入しないほうが正しかったのではないですか」というわけですが。

の大衆運動は大変な効果を上げたのではないかでしょうか。岸内閣は退陣せざるを得なくなったりたんだし、その結果、所得倍増が10年からずに5年でほぼ達成できた。日本人全体が豊かになったのだから、あれは大衆運動の成功だというふうに考えてもいいのではないでしょうか。確かにあのころのメディアは、新憲法感覚が大衆に定着したというふうな評価を下しておりました。

しかし、不思議に思うのは、あれは60年ですから、もう50年たっているわけですね。

50年たって、あの全国的な運動の評価が決まらないということは、これは大変不思議なことです。そういう点では、日本の現代史には不思議なことが数々ございます。

## なぜ佐藤さんがノーベル平和賞？

例えば第二次世界大戦、日本にとってこれはどんな戦争だったのか。つまり大東亜戦争という呼び方が一つあります。太平洋戦争という呼び方が一つあります。第二次世界大戦のアジア版だという言い方もあります。近代史、現代史の先生方に、どういうふうに呼ぶのが一番科学的に正しい呼び方だろうかと聞いても、実はまだ決まっていない。これはとても不思議なことですし、それに関連して、不思議なことというのたくさんあります。

例えば、いまの日本が外国にどうみられているかについて、少なくとも大衆的なレベルでは、日本がどうみられているか、全くわからない。私は、大衆的レベルの中にいるのでわからないところがみえるのですけれども、あれは1972年でしたか3年でしたか、佐藤栄作元総理がノーベル平和賞を受けたことがある。そのときに、私は、さっきのガソリンの例じやありませんけれども、「え、どうして佐藤さんがノーベル平和賞なの？」と不思議に思ったのを覚えています。

外国の特派員の人に「あれ、おかしいんじゃないの。だって、佐藤栄作という人は自民党の総裁で、自民党は憲法を改正するということを党の方針に掲げている。その人に平和賞というのはおかしいんじゃないですか」と聞いてみた。

そうしたら、「それは君、間違っている」というわけです。いろいろ議論すると、佐藤栄作という人は、6年何ヵ月かな、総理の間、非核三原則を絶対に守るといって一度も揺らがなかった。だから、平和賞に相当するんだ、妥当な決定だよ、というのですね。

私は、そうすると、日本人に核兵器を持たせたら何をするかわからない、最近では日本

の近くに何かそんなような国もあるようでございますけれども、日本人自身が核兵器など持つたら何をするかわからない、というふうに外国ではまだみているのかなと思った。だから、佐藤栄作氏が平和賞をもらったということは、日本人はまだまだ信用されていないよ、ということの例になるのかもしれない、というふうに思ったことを、いま思い出しました。

そういう点では、私たちは、やっぱり自分たちをよその国の目でみるということにあまりたけていない。得意ではないのではないかなという気が、私は非常にするわけあります。

それと同じようなことを、昭和天皇がご病気になったときに経験しました。私は3人ぐらいの外交官に——1人は大使で、2人は領事でしたけれども——質問をされた。「自分の國の大蔵が来月来ることになっているんだけど、予定どおり来日していいだろうか」という質問でした。私は何の質問をされているのか、よくわからなかつた。「どういうことですか」といったら、だって、テレビや新聞を読むと、天皇陛下の病気のことばかり書いてある。しかも、どんな病気かについてはどこも触れていない。何となく歌舞音曲は慎まなくてはいかんのではないか、というふうな雰囲気だ。そういうところへ、予定どおり自分の國の大蔵大臣が来たり、大統領が来たりして、あの国は非常識だと思われないだろうかという心配なのですね。

私はそのとき初めて、諸外国が、昭和天皇が病気だったときの報道の自主的な規制をどうみているかということを、距離を置いて考えてみるチャンスを持ったわけあります。あれは決して、どこかの役所や何かから、歌舞音曲は慎むようにというようなことが出たのではないはずだけれども、私は、ユングなんかのいう集合的無意識というのかな、それが表に出た事例だらうと思う。

しかし、外国からみたら、異様な、不思議な国だな、日ごろはわからなかつたけれども、変わってるぜ、というふうな印象を持たれた

のかもしれない。そういうことはかなりあるわけです。

同じように、私たち自身も、外国のことを本当にわからない。よくビジネスマンだとかが「いや、アメリカではね」とか、「ロシアではね」というふうにいうんだけれども、ビジネスマンのいうことは、もともとあまり信用なさっていないでしょうけれども、本当にあまり信用なさらないほうがいい。自分がビジネスマンだったので、そう思うのですけれども。

## 集合的無意識の相互理解

アメリカへ行って、ウォールストリートとワシントンへ行った経験だけで、「アメリカではね」というようなことは絶対にいうべきではないだろう。そういうところだけみたのでは、その國の動向はわからない。私は1年ぐらいしかアメリカにいたことはありませんけれども、西海岸で小売のビジネスをやったとき、どれぐらい人種差別が厳しいかということを身にしみて何度か感じております。そのアメリカ人が今度オバマという大統領を選んだということは、これはものすごい変化だというふうに思います。

アメリカの有権者が、あの人種的な偏見に満ち満ちていた中から、オバマ氏を選べたということは、これは並大抵なことではないなあというふうに思う。その点では、アメリカの建国の精神はまだ衰えていない。つまり、ヨーロッパの階級社会、差別社会を逃れてピューリタンたちが新大陸へやってきた建国の精神、これはウォールストリートやワシントンにいたのでは、全くわからない。地方を回ってみないとわからない。

日ごろはものすごく単純で、下院議員でパスポートを持ったことのない人が7割いるなんていう話も伝わってくるような国で、しかし、アメリカンデモクラシーというものについては、まだちゃんと生きているというふうな感じです。

私は、ベトナム戦争のころにもちょっといたことがあるわけですけれども、日本だったら、ベトナム戦争はやめることができなかつたろうと思う。なぜならば、あれはアメリカが負けていた戦争ですから、負けていた戦争だったら、勝つまでやれというふうになるのが日本です。アメリカ人は、これ以上戦争を続けていたら、アメリカンコミュニティーというものが崩壊すると、そちらのほうの心配を優先させて、戦争をやめさせることができたのではないだろうか。そういうふうに私は推測をしております。

ちょうど外国が日本の集合的な無意識を理解できないように、我々はそういったアメリカンデモクラシーという集合的無意識を理解できないのかもしれない。

そういったものを相互に理解できるようになるには、やっぱりアメリカの文化、そして日本の文化、両方に対する理解がないと、それは難しいのではないかというふうに思います。

同じことが中国についてもいえるわけであります。私は、いま日中文化交流協会というところの責任者みたいなことになっておりますので、年に2回は中国へ行かなくてはならないのですけれども、アメリカやロシアに比べるとずっと難しい国のような気が、行けば行くほどいたします。すけれども、その難しい国と本当に理解し合う環境をつくるないと、日本はとても困ります。

というのは、日本の貿易輸出入を合わせた比率は、中国はどんどん伸びてトップになってきております。6～7年前まではアメリカがトップだったのですけれども、逆転してからさらに加速がついている感じです。

ですから、経済だけでみると、中国とのいい関係というものが大前提になっている。そういうときに、我々は中国をどれだけ理解しようとしているだろうか。そういうことになりますと、それは私自身も振り返ってみて、まだかなりわかっていない面が多過ぎるだろう、というふうに思うわけです。

ですから、そういう点では「21世紀における日本文化」ということで考えますと、日本が外国にどうみられているかということを、可能な限り何度も繰り返して考えるのと同じように、我々はその国をどう理解したらいいかということを繰り返して考えなければいけないのではないか。完全にお互いを理解するということは難しいとしても、それに近づく努力を常に続けないといけないのではないか、というふうに私は思います。

どうして日本は国際的な理解力を弱くしてしまったかというと、いろんな原因があると思います。国際的な理解力が衰えたのは、高度成長期に、その仕上げが行われたような気が私はいたしております。

高度成長期、経済がとにかく最優先テーマでありました。ですから、例えば東京に本社がある会社の人間が、地方の責任者になって行くときに、その地方の歴史をどれくらい勉強していただろうか。その地方の方言をどれぐらい覚えるようにしようと努力していただろうか。私は小売、サービス業に従事していたことが長いのですけれども、ほとんど勉強していなかったのです。

小売やサービス業というのは、そこに住んでいる人に密着しなければいけない地場産業です。その地域の歴史や習慣や言葉をマスターしなければ、本当はいけない。すけれども、「おれは東京から来たんだ、文句あるか」というふうな感じで出かけるビジネスマンが圧倒的に多かった。国内で常に現地のというか国際的な感覚を身につけるという姿勢を忘れていて、それで外国へ行って、急にそういう姿勢になれるということはあり得ないわけです。

そこへいくと記者の方などは、その地方のことによく勉強していくといわれております。これは皮肉ではありません。私がいうとどうも皮肉っぽく聞こえるのは、自分の人柄の至らない点だと思うのですけれども、日本の場合は中央集権がきつ過ぎるということも、一つのマイナスの条件ではないかなというふうに思っております。

## なぜ日本文化は衰弱したのか

そういうふうなことをもうもう足してみると、やはり経済は成長したけれども、文化的にはどうも日本は危ういところに来ているのではないか、という感じがつくづくするわけであります。あるいは、経済最優先思想が文化への関心を弱めた点もあるかもしれない。文化的に危ういところへ来ていて、そこで武器などを持ったら、どんなことになるかわからない、という不安が私には非常に大きい。

最近もいろんなことがあって、軍隊があつたらクーデターが起こっているのではないか、というふうなことを、秘かに恐れるような心境にもなったりするわけであります。なぜそういうことになったか。なぜ日本の文化は衰弱したといわれるのか。

『日本語が滅びるとき』という本も大変読まれたようあります。一つは、日本語についてのセンスというか、感度というか、これを大事に思うというところが不足している。テレビなどを見ていても、つくづくそう思うことが多いわけです。いつの時代も若者言葉というのは、飛ばしたり、それを粹がったりするというので、言葉を乱している場合も多いのですけれども、問題はもとになる日本語について、日本語を大事に思うという意識がなくなっているという事実であります。これを直さなければならぬのですけれども、文化の衰弱の原因を少し項目ごとにまず挙げてみます。

ひとつは、やっぱり共同体の消滅ということが、これは大きいだろうなというふうに私は思います。共同体というのは、何も村落共同体ばかりではありません。地域共同体のみならず、国と個人との間にあって、個人を支えていた場所、例えば職場共同体もそうでした。一時、村落共同体がなくなったのをカバーするように、職場共同体というものが重宝がられました。

それから労働組合、これもやはり一つの共同体で、社会学でいうところの中間組織です。政党も同業組合も、そういう意味では国と個人の間にあってまとめていました。しかし、そういった中間組織がいずれも大衆の信頼を失いました。

例えば、いま働いている人に、労働組合というのを知っていますかと聞けば、大体知っています。「何をするところですか」というと、「組合費を集めます」。「集めてどうするんですか」「いや、どうするんでしょうね、時々、パーティーを開きます」みたいな話で、つまり、労働組合は何をしているかということについての答えは出てこない。

政党の場合もそうです。「政党ですから、選挙をやります」。「はあ、それ以外は?」といったら、「何か時々演説会はあります」というふうなことで、どうも精神的な結合というものが非常に弱くなっている。

## 大衆消費社会と共同体的要素の崩壊

有名な映画に、森田芳光という人がつくった「家族ゲーム」というのがあります。もう20年ぐらいになるかな。これは家族が食事をする場面が最も有名ですけれども、長いベンチのような食卓で、向かい合って食べないんですね。みんな一列に並んで食べている。何をみているかというと、正面にテレビがある。家族がみんなテレビをみながら食事をする。家族の間に会話はない。これが家族ゲームの一番有名なシーンでありますけれども、そういう状態が大衆消費社会と名づけられて、全国的に広がった。

そこで、会話がなくなった。家族の間でさえ会話がなくなったのですから、会社へ行つても会話がない。会話がなくても、終身雇用とか年功序列とか、そういうふうな古いルールがあった時代は、まだそれなりの法則がありましたけれども、いま勤めている人で終身雇用を信じている人はほとんどいなくなったのではないか。そういうことになりますと、

国全体として、いまほど共同体的要素が消滅した時代はなかったのではないだろうか、というふうに私は思うのです。

そうしたことに対して、よく昔は子どもが悪さをすると、横町のご隠居さんが「こらこら」といって子どもを訓育したものだ、しかったものだ、というような話が懐かしげにされます。いま、そんなことをしたら、お母さんが「うちの子どもに、あなた、何をするんですか」といって大変です（笑い）。私も随分そういうたくましいお母さん方とやり合った経験があります。

私はいま、自分が卒業した私立小学校の理事長を仰せつかっています。20数年前からですが、行ってみるとその学校が、いつのまにか優秀受験進学校となっていました。私はこれはいけないと思ったのです。卒業生のほとんどが優秀中学に入る。優秀中学に入りますから、いよいよまたいろいろなところから電車に乗ったりして生徒が集まってくる。

追跡調査をしましたら、その私が理事長をやっている小学校の卒業生は、入るときはベストテンに2人とか3人とか入っている名門校になっているのですけれども、元気がないから、中学の2年になり3年になるとだんだん成績が落ちていく。やはり小学生の時代は、知育ばかりではダメなのです。体育や情操を同じように鍛えなければいけないんだということが追跡調査でわかりましたので、カリキュラムを変えました。体育は毎週、図画工作、音楽等は隔週と授業をふやしました。

そうしたら、PTAに呼び出されてつるし上げられました。「理事長さん、あなた、そんなくだらない授業をやって、もしうちの子が一流中学へ入らなかったら責任とるか」というのですね。「いや、皆さん方のお子さんの将来を考えたら、小学校時代には体育も情操教育も平均して行わなければ、大人になってからの伸びがないんですよ」といっても、絶対に後へ引かないのです。

私はとうとう切れて、「わかりました。あなた方と私とは教育観が違いますから、どう

してもお嫌なら転校なさってくださって結構です」といったのです。これ、私立だからいえたのです。国公立だったら、暴力的な理事長といって、どこかの新聞のトップ記事か何かになったのではないかでしょうか。

ですから、先生方をみていると大変なのです。PTAにも報告をする。教育委員会にも報告をする。報告する場所はみんな教育現場を知らないところです。教育現場を知らない人にわかるように書くということは大変に難しい。だから、児童一人一人と接触をしている時間はない。

テレビを見る時間もない。子どもたちのほうはテレビをみていますから、「ドラえもん」にしても「ちびまる子」にしてもよく知っているわけです。先生方は知らない。「ルパン三世」にしても大河ドラマも見ている暇がない。そこで情報量で児童のほうが上になるんです。そんなのも知らないのといわれて、先生方が尊敬されなくなる。そういうことの結果、いろんな要素でもって共同体は壊れていくわけです。

だから、卒業式などの時に、私は機会があれば、一流中学へ進ませようと思うな、と申します。子どもには個人差があって、発達する度合いは一人一人違うのだから、中学校へ行ってから知育が急に伸びる子もいれば、高校で初めて伸びる子もいる。いろいろなのだから、人間としての力をつけるようにしなさいというのです。

一流の学校へ行かせたいというのは、そこを卒業して一流の企業、新聞社だとかテレビだとか、一流の官庁、そういうところへ入れたいからでしょう。テレビや新聞はどうだか知りませんが、しかし、一流の企業はあなたの方の子どもさんが40歳や50歳になったときには、ほとんどと言っていいくらい消えていましたから、そのときに自分はどうしたらいいかと判断できるような人間になっていないとダメなのです、というようなことをいうことにしています。

だいぶ嫌がられておりましたが、だんだん

それも定着してきて、先生方が理事長に恥をかかせるな、みたいなことになってきて、進学率もあまり落ちていないので、ほっとしているんです。けれども、やっぱり共同体というものの消滅というのは、文化の水脈を弱くするうえで非常に大きかったと思います。

ただ、若者たちは、やっぱり人間ですから、どこかに共同体をつくっている。皆さん方はおそらくおいでになったことはないと思いますが、シンガーソングライターなどの集会へ行くと、明らかにそこには若者たちの熱烈な共同体が形成されています。そういう点で、若者たちが求めている共同体を理解するというところから始めないと、共同体の再生は難しいかなというふうに思います。

### 宿痾の「思想と感性」の不一致

文化の衰弱の原因の2つ目は、思想と感性の不一致です。これがばらばらになっていても、我々はあまりこれをつらい大変なことだと思わない。これはどうも私は明治維新以来の日本の文化の宿痾だと思うのです。明治維新以后、思想というものが、思想に関する知識となり変わりました。

それで、プラトンにしてもアリストテレスにしても、あるいはドイツ観念論のカント、ヘーゲルにしても、そういうものについてよく読んで、知識を蓄える、これが思想だというふうな間違った理解が広がりました。そういった思想の知識は、自分の生活、それに基づく感性とは関係がない。本来、思想というのは自分で物事を判断するものだと思うのですけれども、明治以後、思想的空白状態のまま推移してきた。

ですから、差し障りがあるかもしれません、大学でジェンダーの講義をしている先生が、うちへ帰って「おい、お茶」というと、奥様が走り寄って、汗をかいたワイシャツを脱がせてくれる。どかっと座布団に座って、持ってきたお茶を飲む。これと、ジェンダーの講義とどうつながるのかということになり

ますと、それはつながっていない（笑い）。それを何とも思わない。

ある有名な——しかられるようなことばっかり言っているような気がしますが——マルクス経済学の先生が、当時のソ連のゴーリキー市を訪れました。丘の上に登ってみると、建物は壊れているし、立っている煙突の半分ぐらいしか煙が出ていない。さびれ切っているわけです。で、マルクス経済学の大先生は7～8人のお供に向かって、「君、やっぱり資本主義の国へ住んで、マルクス経済学をやるのが一番いいね」といわれたという（笑い）。これはどうも本当みたいです。それに矛盾を感じなかつたという。この知識の状態、感性と思想とが遊離していても何とも思わないことが、やはり日本の文化を衰微させている大変大きな原因になっているのではないかと思います。

### 戦争の後遺症としての伝統断絶

もうひとつ申しあげると、そこから伝統との断絶ということが起こってきます。私は割合、いわゆる革新的な集会などへ行ってしゃべることが最近多いのですけれども、そこで伝統との断絶などというと、最初のうちはなかなか通りが悪かったんです。

先ほど申しあげましたように「太平洋戦争」と呼んだり、「大東亜戦争」と呼んだり、いろいろしていますけれども、その戦時時代に伝統がさんざん悪用された。悪用されましたので、日本が戦争に負けたときに、もう伝統みたいなものには絶対にとらわれてはいけないという空気になった。

例えば、「俳句は、あれは第二藝術だ」というふうなことをいった方もいらっしゃる。いわれた高浜虚子のほうは「ああ、第二でも第三でも俳句を藝術といってくれたかね」といって高笑いをしたという話も伝わっておりますけれども。特に外国文学者が伝統を嫌う。これはやっぱり外国文学者であるというだけでもってにらまれておりましたから、要注意

人物というふうに思想警察からみられる時代が長かったので、これはある程度無理がないと思います。

けれども、本当の意味で文化が創造力（クリエイティビティ）というものを回復するには、伝統をどう現代に生かすかということがないと、絶対に文化は衰えをカバーすることができません。

その点では、日本の文化そのものが大変いびつな形になっている。例えば、私は現代詩をずっと書いてきて、もう50年ぐらい書いているのですけれども、短歌、俳句を排除したことによって、日本の現代詩は非常に弱いものになってしまったということを身にしみて感じております。

世界的な詩人T・S・エリオットは、『荒地（The Waste Land）』という作品で詩の世界にノーベル文学賞をもたらした人ですけれども、彼は自分に才能があると思ったときは、それは自分ではなくて、伝統がその詩人の中に入っていて、作品をつくらせているんだ、というふうなことをいっています。伝統と断絶しているということが、やはりもう一つ、思想と感性の乖離と、あるいは共同体の消滅ということと並んで、大きな衰微の原因になっているのではないか、というふうに私は思っています。

## 文化・芸術の能力が高い日本人

いよいよ時間になりましたので、最後の結びですけれども、私は、しかし、希望は捨てていない。日本人というのは相当文化とか芸術については能力の高い人種だと私は思っております。

日本での最初の小説『源氏物語』が書かれましたのは10世紀から11世紀です。去年がちょうど1000年だというふうにいわれておりました。ヨーロッパで女性による最初の小説が書かれましたのが17世紀の終わりですから、そういう意味では大変な差がある。『万葉集』にしてもそうです。『世阿弥』の演

劇論しかりです。私はよく外国の演出家、例えばピーター・ブルックなどから「世阿弥の仮説を読んだとか、英訳を読んだが、あんなすぐれた演劇論を書くことができた日本のいまの演劇界はどうなっているんだ」と聞かれて、現状については「それはあなた、いいものをみなきやだめなんだ」などといい返すのですけれども、本来は相当な能力です。

ですから、どこかがちょっと変われば、洋々たる前途が待っている。いまはちょうど世界的な同時大不況、恐慌に向かって走っているのではないかと思われるような困難が広がっております。

私はよく経済の方々に申しあげます。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という言葉があります。ところが、この例えが通じる経済人がだんだん減ってきました。それで、説明しなければならない。

こういうのを説明するぐらい味気ないことはないのです。しかし、雪国であったらまだいいんですよ。国境の長いトンネルを抜けたら異次元であったということになるかもしれませんと説明しています。少なくともアメリカの一極支配という事態はもう終わっていますよ、というふうなことをいうのですけれども、経済人の間では通りが悪い。

隧道を抜けた時は、小さくなつたアメリカの他に、EU、中国それにインドとかBRICsと呼ばれている諸国のうちのひとつぐらいが極になつているかもしれない。おそらくまた、経済を優先させて考えるという考え方は後方に退いて、インドのセン教授ではありませんが、社会総体の中に経済を置いて考えるということになつているのではないかと思います。ですから、文化についての主張が経済人の間で通りが悪くても絶望しません。皆さま方がその経済人を叱咤激励してくださればいいのですから。皆さま方に日本の将来の命運をかけて、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（文責・編集部）